

森林音のエンタテインメント性を向上させる音楽演奏とインターネット配信

研究代表者

中 村 和 彦

東京大学大学院新領域創成科学研究科 講師

1 はじめに

近年の日本における携帯電話網は、人口カバー率ほぼ 100%を達成している一方で、面積カバー率は 6 割程度にとどまっている。この圏外の大部分は森林地域である。日本は国土面積の 3 分の 2 を森林が占めるにもかかわらず木材自給率は 4 割程度にとどまっており、従来型の林業は依然として採算ベースに乗らない場合が少なくない。このような状況を打開する方向性の一つとして、森林地域におけるエンタテインメント性のある事業によって追加の収益を生み、荒廃が進む森林の管理健全化に資する取り組みが求められている。例えば、2005・2006 年度の林野庁モデル事業に採用されたフォレストアドベンチャーは、森林内の樹木をそのまま活用してワイヤーロープや梯子などのアトラクションを設置するもので、その汎用性の高さから（平野、2020）、全国 40 箇所以上（2025 年 6 月現在）の施設を開設、経営するに至っている。この事業に代表されるように、従来の森林エンタテインメントは、五感を存分に活用した現地での体験・活動型のレジャーが主流であった。

しかし、森林は都市部から遠距離に位置しており、頻繁な訪問が難しい場合も多い。より影響力の強い取り組みを生み出すためには、直接の訪問による体験だけでなく、インターネット越しの映像と音のみによる遠隔体験も組み合わせ、より多様な森林エンタテインメントの可能性を探ることが望まれる。このような試みの端緒としては、(株)JVC ケンウッドが 2013 年 3 月にリリースした Forest Notes という月額制の森林音ライブストリーミング配信サービスが挙げられるが、2017 年には無料化されるなど大きな収益化には至っていない。

森林は鳥や虫などが極めて魅力的な音響を奏でる瞬間も確かにあるが、多くの時間帯は非常に静まじやかで、専門的な知見をもたない多くの人々にとって楽しむことが難しい。インターネット越しに遠隔地の森林を多くの人々が楽しむには、特に音に関して森林のエンタテインメント性を顕著に高める、何らかの仕掛けが必要となる。従来、森林をはじめとする自然の映像コンテンツに対しては、National Geographic に代表されるような高度な編集によりエンタテインメント性を高めることが主流であったが、こうした編集は必ずしも自然の姿を正しく伝えていないことが指摘されていた（Deogracias and Mateos-Pérez, 2013）。

一方で、音に関するエンタテインメント性について考えるうえでは、音楽の存在を無視することはできない。実際に、イギリスのグラストンベリーや日本の FUJI ROCK などに代表されるような野外音楽フェスティバルは、都市から地方へ人を呼ぶエンタテインメントとして一定の地位を得ている。しかし、これらは山間部の森林というよりも広く切り開かれた農場やスキー場等が会場となることが多い。森林での音楽演奏の例としては、ドイツの Waldbühne（「森の劇場」の意）でベルリン・フィルハーモニー管弦楽団が 1980 年代から毎年コンサートを行っており、その集客要因の分析研究（Szuta, 2017）なども行われている。しかし、やはりこれも 20,000 人以上を収容する大型施設を用いるものである。単に演奏会場が森林に囲まれているということではなく、森林そのものの空間内での音楽演奏を対象とすることで、真に森林の音環境自体のエンタテインメント性を評価できる。

そこで本研究では、一般的な森林空間における音楽演奏が、現地聴取者およびインターネット配信による遠隔聴取者の森林音への関心に及ぼす影響を明らかにし、これを通して森林音のエンタテインメント性を向上させる音楽演奏とインターネット配信の在り方を考察することを目的とする。

2 対象と方法

2-1 森林内音楽演奏

音楽演奏の実施場所は、東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林・富士癒しの森研究所の森林内とし、音楽演奏の形式と曲目は拡声しない弦楽三重奏（ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ）による『ゴルトベルク変奏曲』（J. S. バッハ作曲）とした（図 1）。実施する時間帯は車両の走行音などの影響が少ない早朝 6 時から 7 時頃までとし、この時間帯に過ごしやすい気象条件となることを考慮して実施時期を 7 月頃とした。

本研究において、奏者は森林内でも安定した演奏が可能な高い技量を有している必要があるため、国内有数のプロオーケストラである NHK 交響楽団所属の弦楽器奏者に依頼した。同奏者らは、コロナ禍により一時的に室内での演奏が社会的に断たれていた 2020 年 8 月に東京大学富士癒しの森研究所の森林内において室内楽形式の演奏を試行し、その後に従来の室内演奏が社会的に再開されて以降も同奏者らによる同地での森林内演奏は継続して実施された。この試行に関して同奏者らにインタビューを実施したところ、各氏が森林内での音楽演奏をプロ奏者として有意義な活動と認識していることが確認された。

上述のような演奏形式の呼称は、従来の森林科学における森林空間の呼称である「林内」を援用し、森林空間における室内楽形式の音楽演奏であるため「林内楽」（りんないがく）とすることとした（中村, 2024）。



図 1：本研究の対象とした森林内音楽演奏（2022 年 7 月 28 日実施時に著者撮影）

2-2 実験方法

（1）音楽演奏配信方法の検討

森林内での音楽演奏をインターネット配信する方法を検討するため、2022 年 7 月 28 日（木）早朝 6 時より 1 時間程度「癒しの森の朝もや音楽会」として、音楽演奏とそのインターネット配信を実施した。奏者との位置関係が異なる 3 箇所に収録機器（マイク）を設置し、遠隔での聴取者が各マイクの音源を自由に選択できるようにした。マイクの場合は、①奏者らの至近、②奏者から 10 メートルほど離れた木の上（地上 5 メートルほどの高さ）、③奏者から 10 メートルほど離れた直接音が届かない建物裏の 3 箇所とした。

このような状況において、森林内音楽演奏を現地で 4 名に、遠隔で 4 名に、いずれもリアルタイムで聴いてもらった。このとき、遠隔聴取者には 3 つのマイクがどのような位置に設置されているかの情報は与えず、それぞれ異なる位置である旨だけを伝えた。その後、同年 8 月 17 日・18 日の 2 日間にわたって、各人 1 時間程度の聞き取り調査を行った。

（2）森林内音楽演奏が森林音への関心に及ぼす影響の検討

森林内音楽演奏が森林音への関心に及ぼす影響を検討するため、2023 年 7 月 16 日（日）早朝 6 時より 1 時間程度「癒しの森の朝もや音楽会」として、音楽演奏とそのインターネット配信を実施した。前年の結果も踏まえて、インターネット配信は奏者から 3 m 程度の位置にマイク付きカメラを設置し、その映像を YouTube ライブでリアルタイム配信した。

このような状況において、現地聴取者と遠隔聴取者に対してそれぞれ任意参加のアンケート調査を実施した。森林音への関心に及ぼす影響を包括的かつ探索的に検討するため、記述式回答の設問として「演奏に対

して何を感じたり、行動したりしましたか。」と「森に対して何を感じたり、行動したりしましたか。」の 2 つを設定し、回答の記述内容を定性的に分析した。

（3）森林内音楽演奏における音楽と森との一体性の検討

森林内音楽演奏において、音楽と森とがどのように一体化して聴取者に伝わるのかを、現地聴取者と遠隔聴取者で比較検討するため、2024 年 7 月 14 日（日）早朝 6 時より 1 時間程度「癒しの森の朝もや音楽会」として、音楽演奏とそのインターネット配信を実施した。前年の結果を踏まえて、インターネット配信は奏者から前年より遠い 5 m 程度の位置にマイク付きカメラを設置し、その映像を YouTube ライブでリアルタイム配信した。

このような状況において、現地聴取者と遠隔聴取者に対してそれぞれ任意参加のアンケート調査を実施した。質問項目は、全体的な印象について問うもの（5 項目の形容詞対に対する 7 件法）、森と音楽の度合いについて問うもの、森と音楽の一体性について問うもの（5 項目に対する 5 段階のリッカート尺度）、過去の「癒しの森の朝もや音楽会」現地参加経験、年齢層、自由記述とし（図 2）、現地聴取者と遠隔聴取者に同じ項目を尋ねた。各質問項目を単純集計して傾向を確認したうえで、各項目に対して聴取方法（現地か遠隔か）と過去の参加経験の有無を独立変数とした 2 要因分散分析（有意水準 5%）を行った。

① 今回の「朝もや音楽会」について、以下の5項目それぞれ
1～7のうち最もよく当てはまると思う□に印をつけてください。

	1 非常に	2 かなり	3 やや	4 中間	5 やや	6 かなり	7 非常に	
静かな	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	にぎやかな
やわらかい	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	かたい
くつろいだ	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	張りつめた
すがすがしい	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	うっとうしい
好き	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	嫌い

② 今回の「朝もや音楽会」の全体を10としたとき、
森と音楽の度合いをそれぞれどの程度に感じましたか。
2つの合計が10になるように以下のカッコ内に整数を記入してください。

森（ ）：（ ）音楽

③ 今回の「朝もや音楽会」について、次のa～eをどう思うか教えてください。

a) クラシック音楽があつてこそ、森の本当の良さを味わえる。
【非常にそう思う/ややそう思う/どちらともいえない/あまりそう思わない/まったくそう思わない】

b) クラシック音楽がないほうが、森の良さを味わいやすい。
【非常にそう思う/ややそう思う/どちらともいえない/あまりそう思わない/まったくそう思わない】

c) 森の中でこそ、クラシック音楽の本当の良さを味わえる。
【非常にそう思う/ややそう思う/どちらともいえない/あまりそう思わない/まったくそう思わない】

d) 森の中ではないほうが、クラシック音楽を味わいやすい。
【非常にそう思う/ややそう思う/どちらともいえない/あまりそう思わない/まったくそう思わない】

e) クラシック音楽と森とは、分かちがたく一体的なものである。
【非常にそう思う/ややそう思う/どちらともいえない/あまりそう思わない/まったくそう思わない】

④ これまでにこの場所で参加した「朝もや音楽会」に○をつけてください。

【 2020年8月30日 / 2022年7月28日 / 2023年7月16日 】

⑤ あなたの年齢層に当てはまるものに○をつけてください。

【 0～14歳 / 15～24歳 / 25～44歳 / 45～64歳 / 65歳～ 】

⑥ 今回の「朝もや音楽会」について、裏面へ自由にお書きください。

図 2：2024 年 7 月 14 日実施の「癒しの森の朝もや音楽会」におけるアンケート項目

3 結果と考察

2-1 音楽演奏配信方法

2022 年 7 月 28 日の森林内音楽演奏において、現地聴取者 4 名と遠隔聴取者 4 名に対する聞き取り調査により得られた主な知見は、以下の通りである。

- ・現地聴取者は、座席が固定されていない森林内において、奏者に対してどの位置で聴くかを適宜変えながら楽しんでいた。また、聴く位置は固定していたとしても、視線は奏者らに向けて固定し続けるわけではなく、木の枝を渡るリスなど森林のほうにも向けていた。
- ・遠隔聴取者は、約 1 時間にわたる森林内音楽演奏の配信を、いずれも大きなストレスなく楽しんで聴くことができた。聴くマイクの選択においては、森の音と楽器の音との良いバランスを求めようとした意図がみられ、特に②の樹上マイクが好まれる傾向にあった。③の建物裏マイクは人通りのある位置だったため人の気配が感じられて避けられる傾向にあった。
- ・遠隔聴取者では、聴くマイクを選択するにあたって、事前にそれらの場所の情報が得られていたほうが、配信をより楽しめたと思うという意見が多かった。

以上の結果からは、現地聴取者と遠隔聴取者ともに、森林内音楽演奏においては森林と音楽の両方をバランスよく楽しもうとする傾向が示唆された。ここでのバランスとは、遠隔聴取者にとっては主に音量のバランスであり、マイクの位置関係に大きく依存する。従来の音楽演奏の配信においては、奏者に近い位置にマイクを設置することが通例であり、音楽の配信という点からは合理性もあるが、森林内音楽演奏においては森林音とのバランスを取る必要があるため、奏者から少し離れた位置にマイクを設置することも有効であると考えられた。

2-2 森林内音楽演奏が森林音への関心に及ぼす影響

2023 年 7 月 16 日の森林内音楽演奏において、現地聴取者 111 名と遠隔聴取者 20 名からアンケートへの回答が得られた。設問としては演奏と森という 2 つの要素への関心について別個に尋ねる意図であったが、回答からは演奏と森が相互に分ちがたく一体化していることを示唆する回答が複数見られた。

「演奏に対して何を感じたり、行動したりしましたか。」への回答では、以下のように森にも言及した回答が現地聴取者（■印の回答）と遠隔聴取者（★印の回答）と両者に見られ、森林空間が聴衆の演奏聴取に影響を及ぼしたことが示唆された。

- 鳥のさえずりと朝日こもれ日がうつろう様子と音色の変化が相まって感動しました。
- お日さまと鳥と森林との一体感を感じた。
- 森の中で弦楽器の響きが、やわらかく共鳴して、音楽が心の中に入りました。
- 鳥のさえずりと演奏のコラボレーションが何とも言えない美しさを感じました。
- 静かな朝の森にふさわしい選曲と演奏で日頃感じていなかった森の良さが心を打った。
- アコースティックな楽器の音は自然音と調和する。コンサートホールの演奏会よりみんな（聴衆）楽しそう。空調の効いたホールで奏で聴くことで、私たちは、音楽の何か大切なものを忘れかけているのかもしれない。
- 森の木々のおいと奏でられる音と新緑の色とが一体となってコンサートホールで聴くよりも肌で感じられてよかった。
- ★森への敬意を感じました。静粛な気持ちで聴きました。
- ★森の空気との一体感。

「森に対して何を感じたり、行動したりしましたか。」への回答では、以下のように演奏にも言及した回答が現地聴取者（■印の回答）と遠隔聴取者（★印の回答）と両者に見られ、聴衆の森林認識に対して演奏が媒介的機能を果たしたことが示唆された。

- 鳥たちも気持ち良さそうに演奏をきいていたと感じました。森と一体となっていたように思いました。

- 森と鳥達と共に音楽を聴けた。
- 少しずつ日がさしてくるようすを音楽のうつろいと共に感じた。
- 自然の中でできることは自分が思っているよりたくさんあるのだろうと感じた。
- ★早朝の澄んだ空気を感じました。演奏の始まる前の森の音と、会の終わった後の森の音の違いを感じました。
- ★森の中でこんなすてきな音聴こえてきたら素晴らしい！
- ★曲間に聞こえるせせらぎや鳥の声に癒されました。

以上のように、森林内音楽演奏においては演奏と森が相互に影響を及ぼし合い、その結果として両者が分かちがたく一体化していると考えられた。このことは現地聴取者だけでなく遠隔聴取者においても同様に読み取れたが、一方で遠隔聴取者による「演奏に対して何を感じたり、行動したりしましたか。」への回答では、以下のように森ではなく各自が聴取している場所の生活行動に関する記述が複数見られた。

- ★弦楽器の音色は本当に心地よく、機嫌よく朝の身支度ができました。
- ★起き抜けにオンラインで聞き、とてもゆったりした気持ちになったのでそのまま二度寝した
- ★それぞれの音が美しい。クラシック音楽にうといので、チェロの音を初めてじっくり聴きました、癒される音色ですね。最初はコーヒーを飲みながら聴き、徐々に活力がわいてきました。途中、洗濯ものを干しながら聴きました。
- ★早朝に合った心地よい演奏でした。朝食を作るキッチンで聴きました。
- ★現地だと音だけでなく響きとかが伝わってきたが、PCだと段々に聞き流しになって、朝食をたべたりとかニュースを見るなど、他のことをするようになってしまった。

以上の結果からは、森林と音楽のバランス感という捉え方よりも、森林と音楽が分かちがたく一体化されるという特徴をどのように捉え、そして活用していくかという観点が、森林音のエンタテインメント性について検討する際に有効であると考えられた。現地聴取者は、分かちがたく一体化された森林と音楽を五感で総合的に体験する一方で、遠隔聴取者は配信されてくる一体化された「林内楽」を各自の価値観と状況を通して受け取るため一層多様な反応が見られると考えられる。

2-3 森林内音楽演奏における音楽と森との一体性

2024年7月14日の森林内音楽演奏において、現地聴取者100名（うち32名が過去の現地参加経験あり）と遠隔聴取者100名（うち8名が過去の現地参加経験あり）からアンケートへの有効回答が得られた。

（1）全体的な印象

現地聴取者と遠隔聴取者のいずれにおいても、「静かな」「やわらかい」「くつろいだ」「すがすがしい」「好き」の各印象に対する肯定的な回答が多かった。現地聴取者では、5項目とも「非常に」と「かなり」を合わせて7割を超え、「くつろいだ」「すがすがしい」「好き」の3項目は「非常に」のみで6割を超えた（図3-1）。遠隔聴取者では全体的に現地聴取者より各項目の肯定度が低いものの、5項目とも「非常に」と「かなり」を合わせて6割を超え、「くつろいだ」「すがすがしい」「好き」の3項目は「非常に」のみで5割を超えた（図3-2）。聴取方法が現地か遠隔かによらず、特に「くつろいだ」および「すがすがしい」印象を聴取者が強く感じるとともに「好き」という評価をしたと考えられる。

同5項目をそれぞれ従属変数とした2要因分散分析の結果、現地聴取者のほうが「好き」な印象が有意に強く、総合的な評価としては現地聴取者のほうが高くなる傾向が認められた。また、遠隔聴取者でのみ過去の現地参加経験があると「静かな」印象が有意に強かったため、現地では感じられやすい「静かな」印象が、現地での参加経験がない遠隔聴取者には感じられにくい傾向が認められた。これらの結果から、特に「静かな」印象は現地でより強く感じられるものであり、そのことが「好き」という総合的な評価をより強める要因になっている可能性も考えられた。

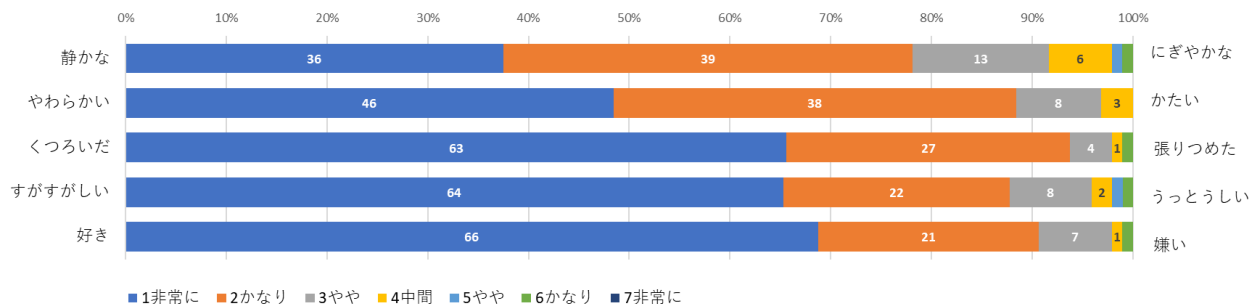


図 3-1：現地聴取者による全体の印象に関する回答の単純集計

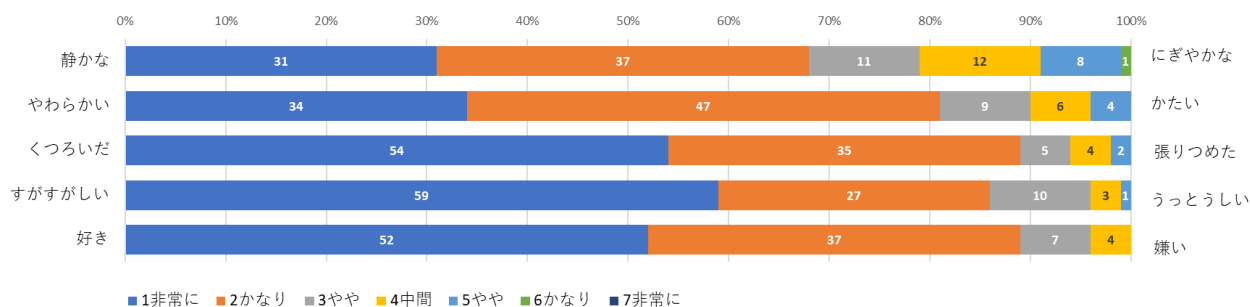


図 3-2：遠隔聴取者による全体の印象に関する回答の単純集計

（２）森と音楽の度合い

「全体を 10 としたとき、森と音楽の度合いをそれぞれどの程度に感じましたか。」という質問に対しては、現地聴取者では「森 5：音楽 5」が 37.5%と最も多く、ついで「森 4：音楽 6」が 23.9%となった（図 4-1）。遠隔聴取者では、「森 4：音楽 6」が 31.0%で最も多く、ついで「森 5：音楽 5」が 30.0%となったが、「森 6：音楽 4」も 15.0%と現地より多く、「森 7：音楽 3」も 9%と現地より多かった（図 4-2）。

全体的に音楽のほうがやや度合いが大きい傾向が見られたが、現地では森と音楽が同じ度合いで調和的に捉える傾向が強く見られ、森と音楽の一体化が実現していたことを示唆するものと考えられる。遠隔では全体的に現地よりも「森 5：音楽 5」の回答割合が減り、森と音楽いずれかの度合いが大きいと感じられやすくなったことから、森と音楽の調和性は固定点でのマイク付きカメラによる配信では相対的に感じにくかったと考えられる。

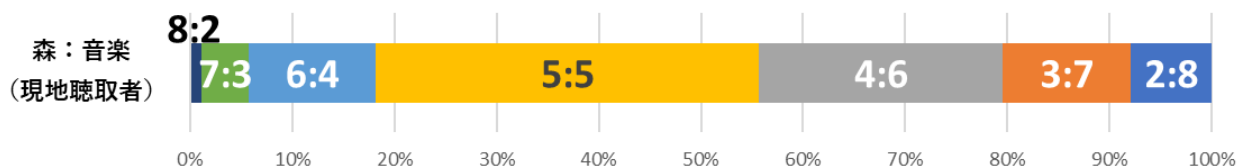


図 4-1：現地聴取者による森と音楽の度合いに関する回答の単純集計

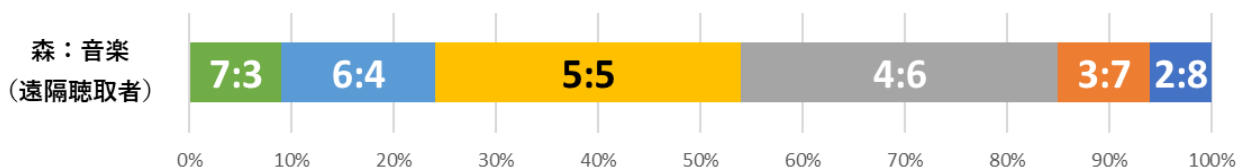


図 4-2：遠隔聴取者による森と音楽の度合いに関する回答の単純集計

（３）森と音楽の一体性

森と音楽の関係に関する５項目の回答は、現地聴取者では５項目とも「非常にそう思う」と「ややそう思う」を合わせた肯定的な回答（逆転項目の場合は「まったくそう思わない」と「あまりそう思わない」）が６割を超え（図５-１）、森と音楽が相互に肯定的な影響を与え合う形で一体化するという前年の定性的分析結果を支持する結果となった。遠隔聴取者では、「クラシック音楽があつてこそ、森の本当の良さを味わえる。」への肯定的回答が現地より多く８割を超えた一方で、「森の中ではないほうが、クラシック音楽を味わいやすい。」（逆転項目）への肯定的回答は現地より少なく５割未満にとどまる（図５-２）など、遠隔での聴取が森と音楽の一体性に影響を及ぼしていることが示唆された。

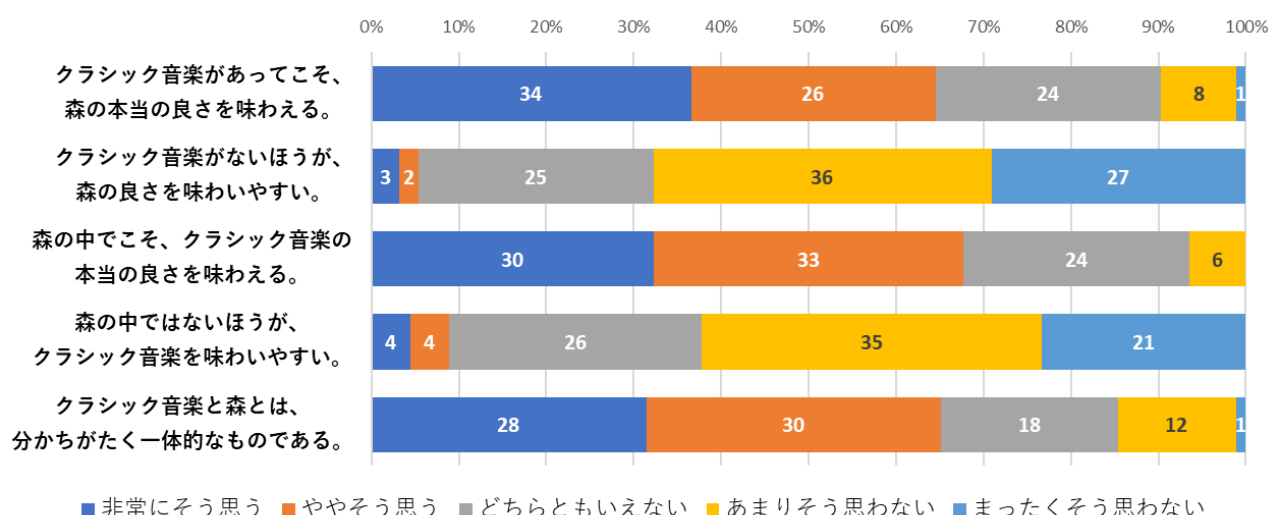


図 5-1：現地聴取者による森と音楽の一体性に関する回答の単純集計

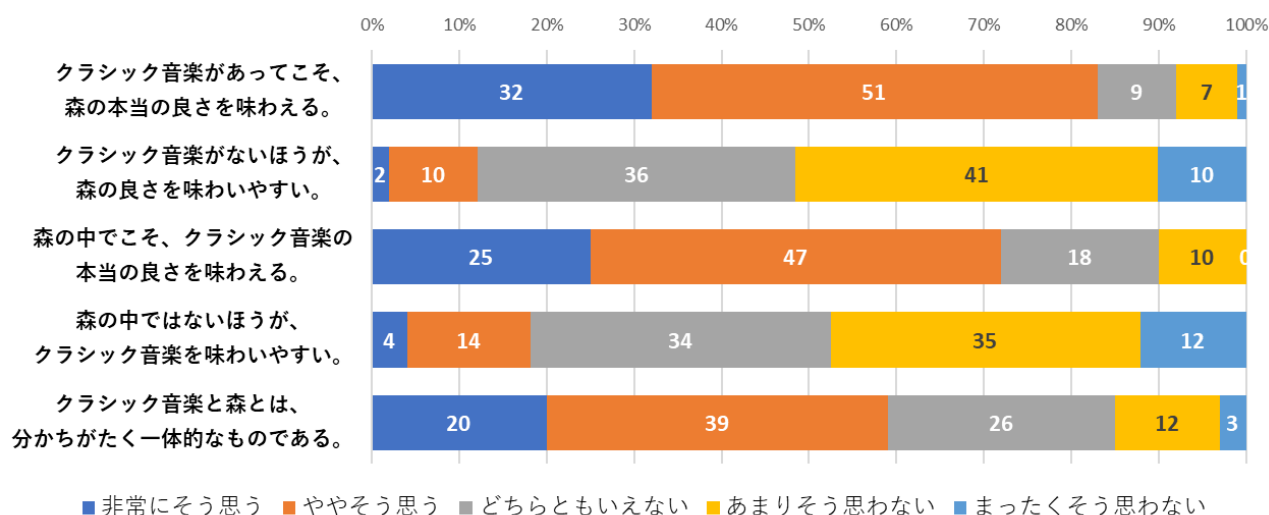


図 5-2：遠隔聴取者による森と音楽の一体性に関する回答の単純集計

同５項目をそれぞれ従属変数とした２要因分散分析の結果、「クラシック音楽がないほうが、森の良さを味わいやすい。」（逆転項目）の回答は現地聴取者のほうが有意に肯定的であり、森におけるクラシック音楽の有用性は現地のほうが強く感じられる傾向が認められた。また、「森の中ではないほうが、クラシック音楽を味わいやすい。」（逆転項目）の回答は、過去に現地参加経験がある場合のみ、現地聴取者のほうが有意に肯定的であり、クラシック音楽を聴く環境としての森の有用性は聴取方法よりも過去の経験をもとに強く感じるようになる傾向が認められた。そして、「クラシック音楽と森とは、分かちがたく一体的なものである。」

の回答は、同じく過去に現地参加経験がある場合で現地聴取者のほうが有意に肯定的であり、さらに遠隔聴取者では過去に現地参加経験がないほうが有意に肯定的だった。つまり、過去の現地参加経験によって遠隔聴取では森と音楽の一体性が感じにくくなる傾向が認められた。これに関しては、遠隔聴取者の自由記述回答において以下の記述が見られたことも、この傾向を支持するものと考えられる。

★去年、現地参加させていただき、森の中で音楽を聴くのは初めてでしたが予想以上に素晴らしい時間を過ごすことができ大いに癒されました。今回は行くことができなかった為ライブを視聴しました。配信ありがとうございました。しかし、やはり現地でないと「朝もやの森の中での音楽」は堪能できないなと感じました。来年はまた現地にて早朝の森の空気の緊張感の中、木々の鮮やかな色・匂いを感じながら音楽を楽しめたらと思います。

4 総合考察

本研究は、森林内での音楽演奏が森林音のエンタテインメント性を高める可能性があることに着目し、3年にわたって森林内音楽演奏とそのインターネット配信を繰り返し行うなかで、森と音楽が一体化するという事象を捉えるに至った。この事象は森林音のエンタテインメント性を向上させるプロセスとして捉えることもでき、特に現地での参加経験のない遠隔聴取者には相応の肯定的な印象を与えることができる。しかし、現地での参加経験がある遠隔聴取者においては肯定度が相対的に下がることから、音楽演奏が森林音のエンタテインメント性を単に高めるというだけでは本質を捉えきれていないと考えられる。遠隔では捉えきれない印象や森と音楽の一体性があったと思われることも加味すると、森林内での音楽演奏は森林音の聴き方を、ひいては森の捉え方を根本的に改める可能性を有するものであり、その特性を踏まえた配信方法と聴取方法を今後さらに検討していくことが必要と考えられる。

このように考えていくと、森と人との繋がりにおいて音楽という芸術が重要な役割を果たし得るものと捉えることができるだろう。2017年に文化芸術基本法が改正施行され、社会状況の著しい変化の中で、芸術が多様な社会的役割を果たすことが求められた。その中で自然環境との関係改善については、昨今の気候危機や生物多様性減少といった地球規模の環境課題を背景として、都市に住まう人間にとって遠い存在となっている自然との繋がりを根本的に捉え直すことが求められる。現状では、環境アートを基軸とした芸術祭が各地で開催されているものの、主な焦点は地域活性化に当てられることが多い。芸術の本質ともいえる「既存の枠組みを破壊した先に、新たな価値やおもしろさを発見し、提示する」(齋藤, 2018)という役割にこそ、焦点が当てられるべきである。芸術の中でも特に音楽については、自然との関連性の深さが古くから論じられてきた。その中でTh. W. アドルノは、遺著『美の理論』(1970)の中で自然と音楽の関係について詳細に論じ、「自然の言語」を翻訳するものとして音楽を捉えようとしている(東口, 1994)。すなわち、自然美を人間の概念的言語によって捉えきえることは困難であり、非概念的言語としての音楽が媒介することを要すると考えられる。これは、自然との繋がりを根本的に捉え直すことが求められる昨今において、注目すべき音楽の役割である。芸術の社会的役割という観点に照らすと、こうした理論を実証的に検討する必要性が高まっているが、従来はあまり積極的に行われてこなかった。本研究の取り組みは、その嚆矢を放ったものと位置づけられる。

また、人と音楽の繋がりにおいて森林という空間が果たす役割という側面も捉えることができる。現代においてクラシック音楽は、コンサートホールのような静寂な場所で集中して耳を傾けるものと認識されている。が、そのようないわゆる公開演奏会という形式は18世紀末から19世紀にかけてのヨーロッパにおける貴族社会から市民社会への転換のなかで、市民主体の芸術文化活動の一環として成立し普及してきた(藤野, 2000)。それ以前の貴族社会においては、音楽は貴族たちの社交の場で主に奏でられていた。それはつまり、音楽が演奏されている場で会話を交わしながら、ときに音楽にも耳を傾けそれを批評するなどして、貴族としての教養を顕示するような場であった(大塩, 2018)。今回の実験で演奏された楽曲を書いたJ. S. バッハは18世紀の作曲家、それはすなわち貴族社会の時代であり、バッハの音楽は公開演奏会のために作られたものではなかったといえる。つまり、バッハの音楽はそもそも集中して耳を傾けるようなものではないとも考えられ、今回の森林内での演奏はこうした楽曲の特徴を浮き彫りにしたともいえる。こういった時代背景に鑑みると、当時のヨーロッパ貴族社会における社交の場でバッハの音楽が奏でられていたように、現代の日本においては森と人の交わりをバッハの音楽が紡ぎ出すという意味付けを与えることもできるだろう。

5 謝辞

本研究の遂行においては、森林内音楽演奏のインターネット配信を行ううえで藤原章雄氏（東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林・助教）に多大なるご協力をいただいたので、ここに記して篤く感謝の意を表する。

【参考文献】

- Deogracias, J.C.S. and Mateos-Pérez, J. (2013): Thinking about television audiences: Entertainment and reconstruction in nature documentaries. *European Journal of Communication*, 28(5): 570-583.
- 藤野一夫 (2000): ヨーロッパにおける演奏会制度の成立と日本の現状, 近代, 85:31-50.
- 東口豊 (1994): 自然と音楽の類似性 ——アドルノの音楽論に関する一考察——. 東京大学文学部美学藝術学研究室紀要 研究, (12): 121-137.
- 平野悠一郎 (2020): 冒険型パークによる森林利用の新展開. 日本森林学会誌, 102(6): 358-367.
- 中村和彦 (2024): 森林空間での音楽演奏が演奏者と聴衆にもたらす心理的影響と媒介的機能. サウンド, (39): 11-14.
- 大塩量平 (2018): 1780 年代ウィーン貴族社会における演奏会需要, 教養諸学研究, 144:1-24.
- 齋藤亜矢 (2018): 芸術の進化的起源. 人工知能, 33(6): 754-761.
- Szuta, A. F. (2017): The factors influencing the popularity of open air, forest based theatres in 20th century Europe. *Journal of Civil Engineering, Environment and Architecture*, 64(4): 159-182.

〈発 表 資 料〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
森林内音楽演奏とそのインターネットライブ配信の試行	2023 年度日本造園学会全国大会	2023 年 6 月
森林内で室内楽形式の音楽演奏を行う「林内楽」の実践的検討	2023 年度日本造園学会関東支部大会	2023 年 12 月
森林空間での音楽演奏が演奏者と聴衆にもたらす心理的影響と媒介的機能	サウンド	2024 年 1 月
森林内音楽演奏の聴取方法による認識の差異：現地とオンラインの比較検討	第 136 回日本森林学会大会	2025 年 3 月